

財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第81集

中台遺跡1349-3地点

2003

千葉県横芝町
財団法人 山武郡市文化財センター

財團法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第81集

なか だい い せき
ち てん
中台遺跡1349-3地点

序 文

中台遺跡（貝塚）が所在する横芝町中台付近は高谷川や木戸川の源流域にあたり、豊かな自然環境を背景に殿塚・姫塚で有名な中台古墳群（芝山古墳群）を始めとして、旧石器時代から近現代に至るまで数多くの埋蔵文化財が所在しています。

埋蔵文化財と自然環境に恵まれた当地域にも成田空港開港を境に開発の波が押し寄せ、道路や個人住宅・店舗の建設が行われるようになりました。

これら開発事業に先立ち、発掘調査が実施されるにつれて郷土の歴史が徐々に明らかにされつつあります。

今回報告する運びとなった中台遺跡（貝塚）1349-3地点は成田空港の騒音対策として個人住宅建設に先立ち調査されたものです。

中台遺跡（貝塚）の調査は今回で3回目にあたります。初回の県道成田・松尾線の調査区の南側に位置し、郡内では類例の少ない柄鏡式の住居跡を始め縄文時代後期堀之内1式期の集落の一部を検出することができました。

この調査成果が、今後の古代史の研究に、また広く一般に活用されることを期待するとともに、今回の調査を実施するにあたりご指導、ご協力を賜りました関係機関並びに関係各位に心から御礼申し上げます。

平成15年3月

財團法人 山武都市文化財センター

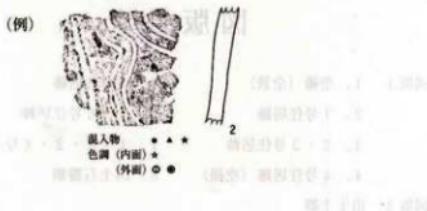
理事長 小倉 幸

例 目 文 言

1. 本書は、横芝町による航空機騒音対策に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に所取される内容は、千葉県山武郡横芝町中台字宮台1349-3番地他に所在する中台遺跡1349-3地点の発掘調査の成果である。
3. 現地調査及び整理作業は、横芝町の委託により、千葉県教育庁生涯学習部文化財課及び横芝町教育委員会の指導を得て下記のとおり実施した。
確認調査期間 平成14年10月10日～平成14年10月11日 面積 99/990m²
本調査期間 平成14年10月16日～平成14年10月30日 面積 273m²
整理期間 平成15年1月24日～平成15年3月20日
4. 発掘調査は、調査課長土屋潤一郎の指導のもと調査研究員木川浩司が担当し、整理・報告書の作成・編集は主任調査研究員鶴見英輔、石器類については調査研究員渡邊高潔が担当した。
5. 住居跡のピットや土坑の深さについては挿図中に記入した。なお、単位はcmである。
6. 調査で使用した遺跡番号は当文化財センター独自のコード番号『山・文・セ-216』である。
7. 出土遺物、図面、写真等の記録類は当文化財センターが保管している。
8. 挿図の第1図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000『多古』及び『成東』である。
9. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関にご指導・ご協力を頂いた。
千葉県教育庁生涯学習部文化財課、横芝町教育委員会

凡 日 図 例

1. 本書で用いた遺構番号は一部調査時と異なっており、該当遺構については本文中に明示してある。
2. 各実測図の縮尺については原則として下記のとおりに統一した。
遺構 住居跡1/80、土坑1/80 遺物 繩文土器1/3、石製品類1/1とし該当しないものに関しては、その都度実測図下、またはスケール下に縮尺を記入した。
3. 土器の胎土中に含まれる混入物・色調（上段内面、下段外表面、1段内外面とも同色）に関しては以下のようない示した。
混入物…●小砂粒、▲石英粒、■赤色粒、＊黒色粒、★小砾、
色調…□赤褐色、○黄褐色、①淡褐色、☆明褐色、●褐色、◎暗褐色、△黒褐色、◎橙褐色



本文目次

序 文	1
例 言	1
凡 例	1
目 次	1
第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の立地	2
2. 周辺の縄文時代後期層之内式期の遺跡	2
第3章 調査の概要	4
1. 調査の経過	4
2. 層 序	4
第4章 検出された遺構と遺物	5
1. 住居跡	5
2. 土 坑	13
3. 遺構外出土遺物	13
第5章 まとめ	17

挿図目次

第1図 中台遺跡周辺の縄文時代後期の遺跡	1	第8図 5・6号住居跡	12
第2図 全測図と基本層序	5	第9図 遺構外出土遺物(1)	14
第3図 1号住居跡と出土遺物	7	第10図 遺構外出土遺物(2)	15
第4図 2号住居跡出土遺物	8	第11図 遺構外出土遺物(3)	16
第5図 2・3号住居跡と3号住居跡出土遺物	9	第12図 中台遺跡周辺地形図	18
第6図 4号住居跡と出土遺物	11	第13図 中台遺跡遺構配置図	19・20
第7図 4号住居跡出土遺物	12		

図版目次

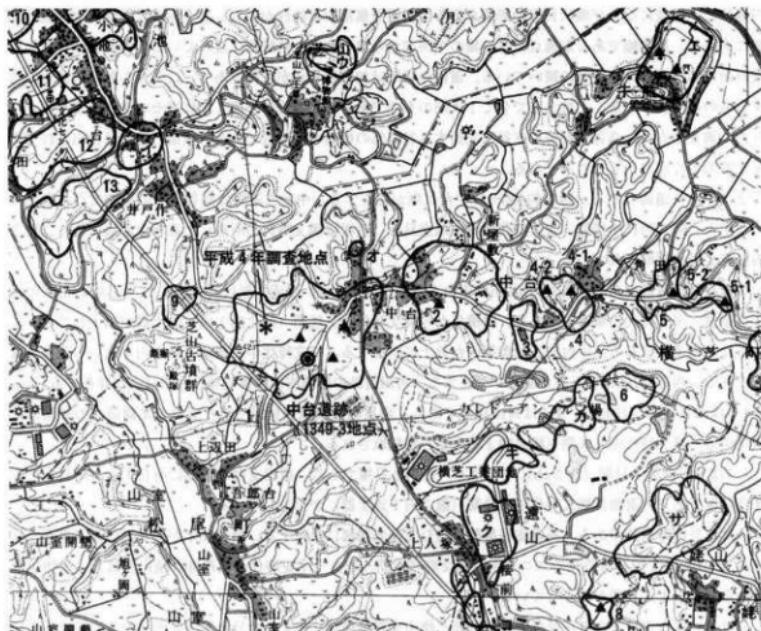
図版1 1. 空撮(全景)	5. 4号住居跡
2. 1号住居跡	6. 5・6号住居跡
3. 2・3号住居跡	7. 1・2・3・4号土坑
4. 4号住居跡(空撮)	8. 出土石器類
図版2 出土土器	

第1章 発掘調査に至る経緯

平成14年7月9日、横芝町中台字宮台1349-3、同5番地について小川明氏から航空機騒音からの移転による個人住宅建設を目的として「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会宛に提出された。照会部分を含む周辺は、中台貝塚として周知されており、過去に県道成田松尾線建設に伴う発掘調査が実施されている。その後、遺跡の取り扱いについて協議した結果、平成14年度横芝町の事業として記録保存の措置を講じることとなり、財団法人山武都市文化財センターに調査を委託した。

(横芝町教育委員会)

第2章 遺跡の位置と環境



第1図 中台遺跡周辺の縄文時代後期の遺跡 (1:25,000)

1. 中台貝塚 2. 中台A遺跡 3. 石作台遺跡 4. 角田遺跡 4-1. 滝巻貝塚 4-2. 角田貝塚 5-1. 木戸台1貝塚 5-2. 木戸台2貝塚 6. 東長山野遺跡 7. 上仁羅台遺跡 8. 山武蛇山貝塚 9. 鰐ヶ淵遺跡 10. 小池麻生遺跡 11. 宮郷台遺跡 12. 田御台遺跡 13. 京寺遺跡 14. 丸辻遺跡 (包蔵地) 15. 井戸作遺跡 (包蔵地) [加曾利B] ウ. 松原遺跡 (包蔵地) [称名寺, 安行] エ. 牛熊貝塚 (貝塚, 包蔵地) [加曾利B, 安行1-2, 姶山] オ. 中台D遺跡 (包蔵地) [塚之内, 称名寺] カ. 北長山野遺跡 (包蔵地) [称名寺, 塚之内, 加曾利B, 安行] キ. 西長山野遺跡 (包蔵地) [加曾利B, 曽谷, 安行1-2] ケ. 上仁羅台遺跡 (包蔵地) [称名寺, 曽谷之内, 加曾利B, 曽谷, 安行1-2] ケ. 桜前遺跡 (包蔵地) コ. 遠山天ノ作 (包蔵地) [加曾利B] サ. 大山遺跡 (包蔵地)

1. 遺跡の立地

本遺跡は、下総台地南東縁の栗山川谷と高谷川谷により南北を区画された松尾台の標高38~43m付近に所在する。本遺跡を含め松尾台を開析する各小支谷（牛熊・中台・長倉・姥山）奥部の台地上には、貝塚を含む数多くの縄文遺跡が分布している。各遺跡の概要については「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（豫報）」（注1）に示されており、このエリアの貝塚研究の基礎資料となっている。

故に周辺遺跡の詳しい紹介については同書と県文化財センター報文（注2）に譲り、第1図には今回の調査で検出された資料と同時期の縄文時代後期に形成された遺跡のみ掲載した。次節では、今回調査の主体である後期掘之内式期間連の遺跡（引用文献中の遺跡でも該期以外の報文は未掲載）に限って述べたい。

2. 周辺の縄文時代後期掘之内式期の遺跡（第1図）

1は今回調査した中台遺跡（貝塚）である。中台貝塚は九十九里地域で最も内陸に位置する地点貝塚であり、高谷川谷と木戸川谷の支谷源頭部の分水界上に所在する。今までに2次に及ぶ調査がされている。1次目は昭和54~55年に県文化財センターにより実施された。報文によると貝層は東西約250m、南北約170mの円弧状に不連続にならび環状貝塚の形態を取る大規模な集落の可能性がある。調査範囲は今回調査地点の北側にあたり、道路幅であるが地点貝塚の環の中央部から南方を貫き外縁部に及んでいる。調査範囲は台地南斜面で木戸川谷の小支谷に続いている。遺構の時期は加曾利B式が主体であり、このうち掘之内式に該当するものは埋壙炉2基、土坑5基で全て1式期のものである。2次目は平成4年に当センターにより調査された。調査地点は、高谷川谷の小支谷に北面する谷頭部の標高41m付近である。該期の遺構は検出されず縄文土器の小片が出土したのみである。

2は中台A遺跡である。西方約100mに中台貝塚が存在する。中台A遺跡は高谷川谷の牛熊支台最奥部に所在する。縄文時代中後期、古墳時代後期の地点貝塚（貝塚は縄文時代の所産）と遺物包蔵地であり、堀之内1式土器が採取されている。

3は石作台遺跡である。西方約100mに中台A遺跡が存在する。平成2年に調査された（注3）。遺跡の主体は奈良・平安時代の集落跡であり、遺構外から縄文時代中・後期（堀之内1式）の土器が出土している。

4は角田遺跡である。中台支谷最奥部の台地上に所在する。縄文時代中・後期（堀之内1式）の遺物包蔵地である。西方約100mに石作台遺跡が存在する。角田遺跡の範囲内に鴻巣貝塚と角田貝塚が存在する。

4-1は鴻巣貝塚（注4ab）、4-2は角田貝塚である。両貝塚とも地点貝塚であり支台の北側斜面の谷頭部に所在する。縄文時代中・後期（堀之内1式土器）が採取される。

5-1は木戸台第1貝塚（注5ab）、5-2は木戸台第2貝塚である。坂田支台の基部に所在する。両貝塚とも地点貝塚であり、遺物は縄文時代中・後期（堀之内1式土器）が出土している。

6は東長山西遺跡である。長倉支谷奥部を臨む支台先端部に所在する。昭和56年から3次に及ぶ調査（注6ab）が行われて旧石器時代のユニット、縄文時代中期、奈良・平安時代の集落跡が検出された。遺物包含層から堀之内1式土器が出土している。

7は上仁羅台遺跡である。長倉支谷最奥部と姥山支谷最奥部に挟まれた分水界上に所在する。平成元年に調査（注7）が行われており、旧石器時代のユニットと縄文時代の陥穴、後・晚期の遺物包含層が検出された。包含層より堀之内1式土器が出土している。

8は山武姥山貝塚である。姥山支谷上流部を臨む台地上に所在する。現状で7個の地点貝塚が環状に分布する当地方で最大級の貝塚である。昭和31年から6次に及ぶ調査（注8abc）が行われた。その結果貝塚は中期～晚期にわたるもので、地点貝塚・遺物包含層・集落跡からなることがあきらかとなった。このうちC

貝塚は堀之内式期の貝層がみられ、貝種は小型のチョウセンハマグリが主体である。

9は蛭ヶ塚遺跡である。木戸川谷の支谷に挟まれた台地上に所在する。昭和54~55年に調査（注9）が行われた。旧石器時代のユニック、縄文土器、古墳が検出された。縄文土器の中には堀之内1式が含まれている。

経緯の考察 1

10は小池麻生遺跡である。昭和45年より16次に及ぶ調査（注10ab）が行われて縄文時代中期後半期（加曾利E式）と古墳時代後半～奈良・平安時代の集落が濃密に展開することが明らかにされている。堀之内式期の資料については、土師期の遺構内から個体復元できる1式の古手の土器が出土している。

11は宮郷台遺跡である。宮郷台遺跡は木戸川谷の柳支谷と三田支谷により開析された地蔵支台に所在する。昭和54年から9次に及ぶ調査（注11abcd）がされており、縄文時代後・晚期、古墳時代・奈良・平安時代、中近世からなる複合遺跡であり集落跡が存在することが明らかになっている。堀之内式期の明確な遺構は報告されていないが、1・2式土器が出土している。

12は御田台遺跡である。御田台遺跡は木戸川谷の三田支谷と御田支谷によって開析された、新林・御田支台に所在する。昭和54年から6次に及ぶ調査（注12）がされており、宮郷台遺跡とはほぼ同様の複合遺跡（縄文時代早・前・中期、弥生時代も含む）であることが確認されている。堀之内式期については、土器が出土している。

13は京寺遺跡である。京寺遺跡は御田台遺跡から小支谷を挟んで東側の支台上に所在する。昭和56年から3次に及ぶ調査（注13）がおこなわれ旧石器時代、縄文時代、古墳時代・奈良・平安時代の複合遺跡であることが明らかとなっている。堀之内式期については、土器が出土している。

注1 1958清水調三「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（豫報）」『史学』27-4

注2 1985海老原光「第1章 遺跡の位置と環境」「主要地方道成田松尾線Ⅴ」千葉県文化財センター

注3 平成2年山武市文化財センター調査

注4 a・1975「横芝町史」横芝町史編纂室

注4 b・1989福見嗣「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群」「考古学の世界」新人物往来社

注5 a・1959「千葉県山武郡木戸台貝塚」「日本考古学年報12」日本考古学協会

注5 b・1977「木戸台貝塚」横芝町教育委員会

注6 a・1983八角章他「第7章東長山野Ⅰ遺跡」「第8章東長山野Ⅱ遺跡」「第9章東長山野Ⅲ遺跡」「東京電力送電線鉄塔建設事業地内八日市場線発掘調査報告書」

注6 b・1990道澤明治「東・北長山野遺跡」北長山野遺跡調査会

注7 1992太田文雄「第1章上仁羅台遺跡第2節縄文時代2. 遺物」「横芝町上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡」千葉県文化財センター

注8 a・注1と同じ、8b・注4aと同じ、8c・1990藤淳一「横芝町山武蛇山貝塚確認調査報告書」

注9 1986奥田正彦「第2章蛭ヶ塚遺跡」「主要地方道成田松尾線Ⅲ」千葉県文化財センター

注10 a・1976戸哲也他「千葉県山武郡芝山町小池麻生遺跡」芝山町教育委員会

注10 b・1983伊藤智樹「第2章小池麻生遺跡第4節2項その他の出土遺物」「主要地方道成田松尾線Ⅰ」千葉県文化財センター

注11 a・1985奥田正彦他「第2章小池新林遺跡第3項遺物(2) グリッド出土の遺物」「第3章小池地蔵遺跡第3項遺物(2) グリッド出土の遺物」「主要地方道成田松尾線Ⅱ」千葉県文化財センター

注11 b・1991石橋宏克「第1章小池地蔵Ⅱ遺跡第2節縄文時代」「主要地方道成田松尾線Ⅰ」千葉県文化財センター

注11 c・1996「IV. 調査遺跡の概要(20) 宮郷台遺跡(860-4地点)」「年報No11」山武市文化財センター

注11 d・1999木川浩司「宮郷台遺跡(地蔵873-1地点)」山武市文化財センター

注12・2000吉田直哉「II検出された遺構と遺物2遺物」「平成11年度芝山町内遺跡発掘調査報告書」芝山町教育委員会

注13・1986伊藤智樹「第2章小池元高田遺跡第3項2グリッド出土の遺物」「主要地方道成田松尾線Ⅳ」千葉県文化財センター

第3章 調査の概要

1. 調査の経過

確認調査については、対象面積の10%に相当する99mについて幅2mのトレンチを7本設定し実施した。その結果、4本のトレンチから縄文時代後期に属する堅穴式住居跡3軒、ピット多数を検出した。しかし、畑の耕作に伴う削平及び搅乱を受け、遺構は覆土や床面の一部を消失しており遺存状態は良くなかった。

確認調査の結果を踏まえ、住宅建設の際に危害の及ぶ範囲2箇所（注1）273m²について本調査を実施し、縄文時代後期掘之内1式期の住居跡6軒（1軒は柄鏡式）、土坑5基、該期の土器・石器類、中近世の土坑1基を検出した。

注1…便宜的に北側本調査区をA区、南側本調査区をB区として記載する。

2. 層序

今回の調査範囲は木戸川谷から伸びる埋没谷の谷頭の西側緩斜面上に位置する。このため調査区の西方にいくに従って地山（ローム層）までの堆積が薄く、畑の耕作の影響が強いために遺物包含層が消失している。

次にA区内の各層について説明を加える。

- I層 表土層。黒色土。耕作土である。35~45cmほどの厚さ。
- II層 暗褐色土。縄文時代後期の遺物包含層である。20~40cmほどの厚さ。（県文化財センター調査時層序のⅡ層相当）
- III層 黄褐色ローム土。いわゆるソフトローム層である。
- ①層 暗褐色土。ローム粒子を多量に含む。2号住居跡覆土
- ②層 暗褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。2号住居跡覆土。
- ③層 暗褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。3号住居跡覆土。
- ④層 暗褐色土。3号土坑覆土
- ⑤層 暗褐色土。ローム粒子を少量含む。3号土坑覆土。
- ⑥層 暗褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。3号土坑覆土。
- ⑦層 褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。3号土坑覆土。

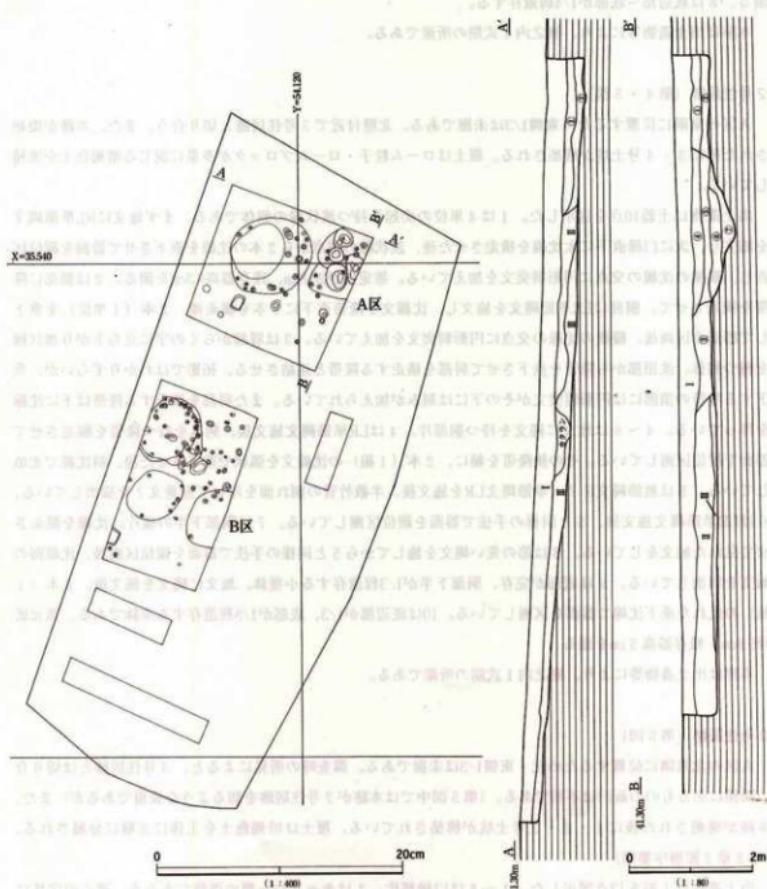
第4章 検出された遺構と遺物

1. 住居跡 (第3図) 出土文書類や1号工具の層序

1号住居跡 (第3図) 出土文書類や1号工具の層序

1号住居跡 (第3図) 出土文書類や1号工具の層序

A区の中程から西よりにかけて位置する。覆土及び掘り込みを大半消失しており、ほとんど表土直下で床面を検出した。かろうじて覆土が観察できた所ではローム粒子が多く混じる暗褐色土が堆積していた。また、風倒木痕により床面が2/3くらい破壊されており、炉などは検出されなかった。平面形は不整円形を呈



第2図 全測図と基本層序

し、残存部分で長径700cm、短径655cmを測る。風倒木痕による破壊が広いために主軸方向や、柱穴構造（支柱穴か壁柱穴）も不明である。

出土遺物は土器を8点図示した。1は無文の小型鉢である。口縁～体部1/2が遺存する。復元口径18.4cm、残存器高8.7cmを測る。2・5・6は沈線や条線による継位施文の胴部片である。2は垂下する沈線により器面を区画後、半截竹管により懸垂文を描出する。5は櫛状工具により懸垂文を描出後、斜位の条線文を充填している。6は器面があまり乾かないうちに懸垂文を施文した破片。3・4は頭部に沈線文で横位区画を施す口縁部片。3は沈線から右下さがりの条線文がみられる。4は拓影ではわかりづらいが小波状を呈する口縁部片である。7・8は底部片。7は底辺部～底部が1/8程遺存する。復元底径10.6cm残存器高5.2cmを測る。8は底辺部～底部が1/4弱遺存する。

本跡は出土遺物等により、堀之内1式期の所産である。

2号住居跡（第4・5図）

A区の東隅に位置するため東側1/3は未掘である。北壁付近で3号住居跡と切り合う。また、本跡が廃絶された後に3・4号土坑が構築される。覆土はローム粒子・ロームブロックが多量に混じる暗褐色土が堆積している。

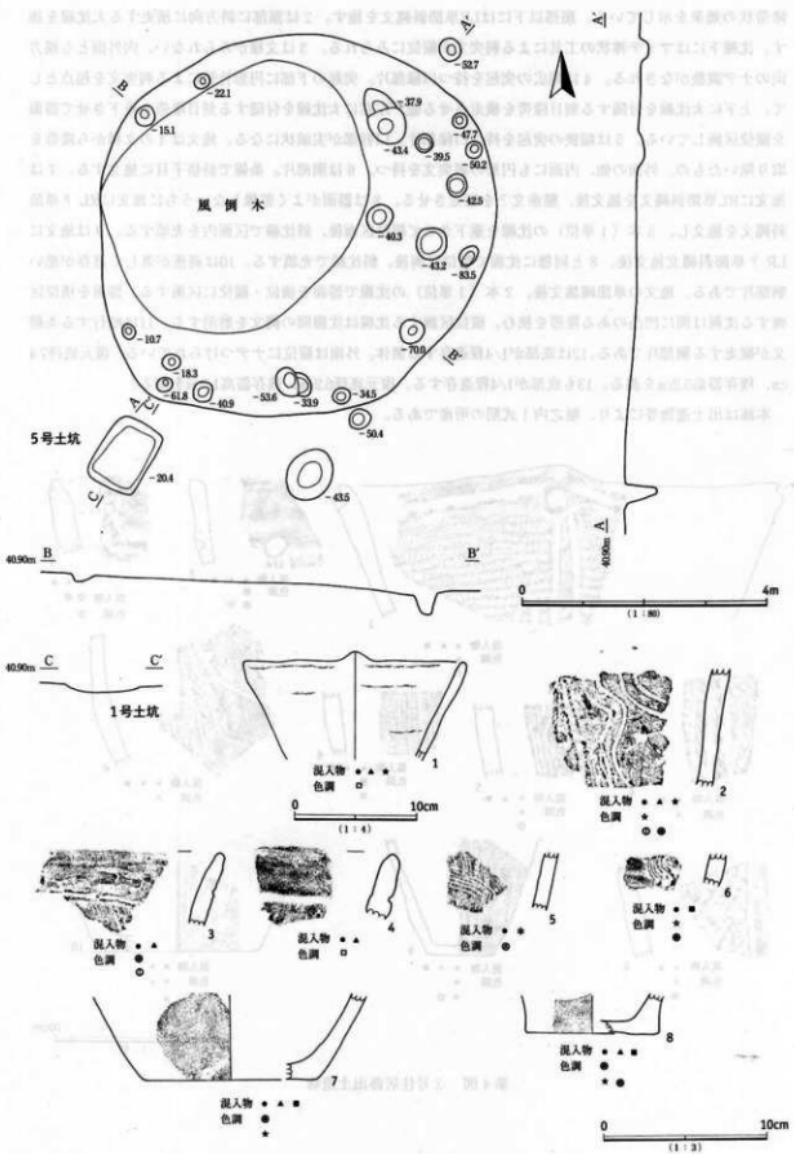
出土遺物は土器10点を図示した。1は4単位の突起を持つ波状縁の個体である。まず地文にRL単節縄文を施し、次に口縁直下に太沈線を横走させた後、波状縁の頂点から2本の沈線を垂下させて器面を継位区画し、継横の沈線の交点に円形刺突文を加えている。推定口径26.8cm、残存器高9.3cmを測る。2は頭部に隆帯を横走させて、胴部にLR単節縄文を施し、沈線文を隆帯直下に1本を横走後、2本（1単位）を垂下して器面を区画後、継横の沈線の交点に円形刺突文を加えている。3は肩部からくの字に立ち上がり波状縁を持つ個体。波頭部から隆帯を垂下させて肩部を横走する隆帯と連結させる。拓影ではわかりづらいが、垂下する隆帯の頭部には円形刺突文がその下には刻みが加えられている。また肩部を横走する隆帯は下に沈線を伴っている。4～6は地文に縄文を持つ胴部片。4はLR単節縄文施文後、刻みを持つ隆帯を継走させて器面を継位区画している。その後隆帯を軸に、2本（1組）の沈線文を弧状や垂下させた後、斜沈線で充填している。5は無節縄文R？・単節縄文LRを施文後、半截竹管の割れ面を用いて懸垂文？を描出している。6はLR単節縄文施文後、5と同様の手法で器面を継位区画している。7は胴部下半の破片。沈線を継走させて乱れた施文をしている。8は節の荒い縄文を施してから5と同様の手法で器面を継位区画後、沈線間の地文を磨消している。9は底部が完存、胴部下半が1/3程遺存する小型鉢。地文に縄文を施文後、3本（1組）の乱れた垂下沈線で器面を区画している。10は底辺部が1/3、底部が1/8程遺存する深鉢である。復元底径9.8cm、残存器高5cmを測る。

本跡は出土遺物等により、堀之内1式期の所産である。

3号住居跡（第5図）

A区の北東隅に位置するため北・東側1/3は未掘である。調査時の所見によると、3号住居跡とは切り合ひ関係にあるものの新旧は不明である。（第5図中では本跡が2号住居跡を切るような表現であるが）また、本跡が廃絶された後に1・2・3号土坑が構築されている。覆土は暗褐色土を主体に2層に分層される。
(第3章2節序参照)

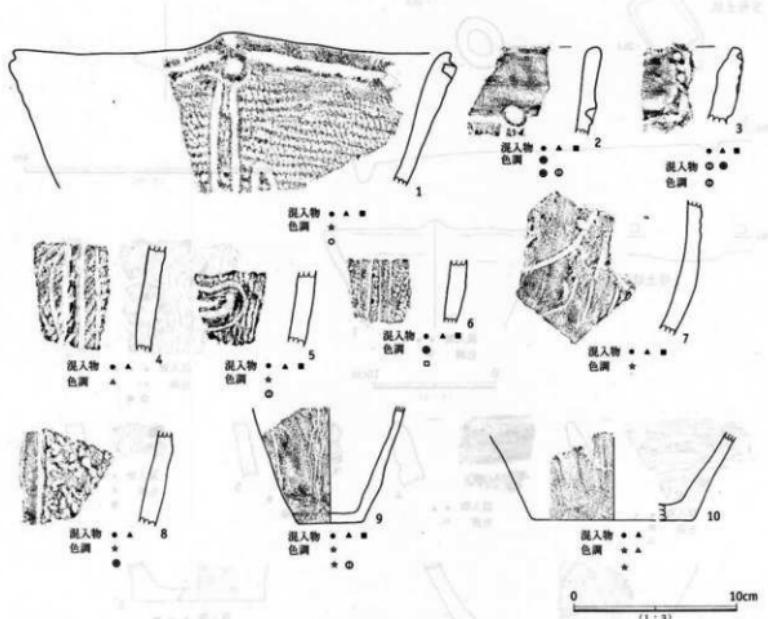
出土遺物は土器を13点図示した。1～5は口縁部片。1はキャリバー型の深鉢であろう。逆くの字状に屈曲しながら内湾気味に立ち上がる。屈曲部は上下に横走する太沈線で区画し、断面が三角形に整形され



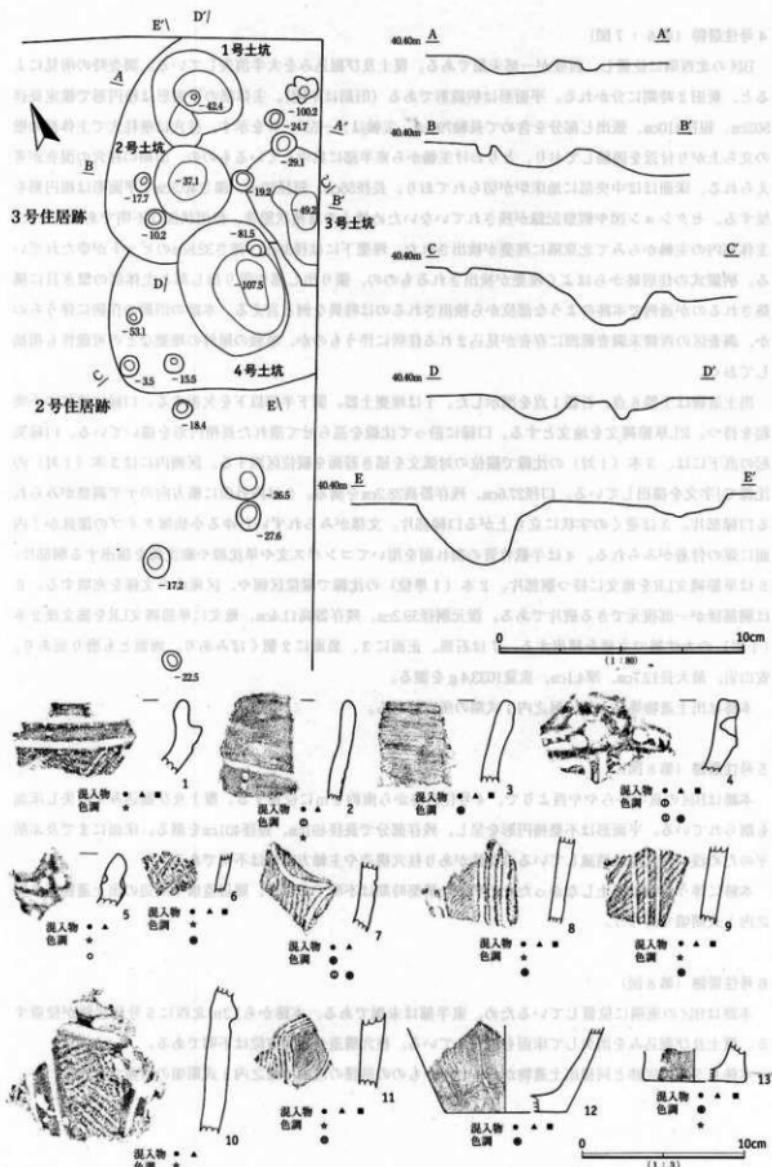
第3図 1号住居跡と出土遺物

隆帯状の効果を示している。頸部以下にはLR単節斜縄文を施す。2は頸部に斜方向に横走する太沈線を施す。沈線下にはマッチ棒状の工具による刺突文が縦位にみられる。3は文様がみられない。内外面とも横向のナデ調整がなされる。4は幅広の突起を持つ口縁部片。突起の下部に円形竹管による刺突文を起点として、上下に太沈線を付随する刻目隆帯を横走させる他、左右に太沈線を付随する刻目隆帯を垂下させて器面を縦位区画している。5は幅狭の突起を持つ口縁部片。口唇部が尖頭状になる。施文は4の文様から隆帯を取り除いたもの。外面の他、内面にも円形の刺突文を持つ。6は胴部片。条線で斜格子目に施文する。7は地文にRL単節斜縄文を施文後、懸垂文?を縱走させる。8は器面がよく乾燥しないうちに地文にRL?単節斜縄文を施し、3本（1単位）の沈線を垂下させて縦位区画後、斜沈線で区画内を充填する。9は地文にLR?単節斜縄文施文後、8と同様に沈線で縦位区画後、斜沈線で充填する。10は剥落が著しく遺存が悪い胴部片である。地文の単節縄文施文後、2本（1単位）の沈線で器面を横位・縦位に区画する。器面を横位区画する沈線は間に凹凸のある隆帯を挟む。縦位区画する沈線は沈線間の縄文を磨消す。11は蛇行する条線文が縱走する胴部片である。12は底部が1/4程遺存する個体。外面は縦位にナデつけられている。復元底径7.4cm、残存器高5.2cmを測る。13も底部が1/4程遺存する。復元底径6.2cm、残存器高1.9cmを測る。

本跡は出土遺物等により、堀之内1式期の所産である。



第4図 2号住居跡出土遺物



第5図 2・3号住居跡と3号住居跡出土遺物

4号住居跡（第6・7図）

B区の北西隅に位置し、西壁が一部未掘である。覆土及び掘込みを大半消失している。調査時の所見によると、新旧2時期に分かれる。平面形は柄鏡形である（旧期は不明）。主体部の平面形は梢円形で推定長径503cm、短径410cm、張出し部分を含めて長軸790cm、主軸はN-52°-Wを示す。柱穴は壁柱穴で主体部の壁の立ち上がり付近を圍繞しており、とりわけ主軸から東半部に集中しているものの、旧期の柱穴の混在が考えられる。床面は中央部に地床跡が切られ、長径56cm、短径52cm、深さ40.5cmで平面形は梢円形を呈する。セクション図や観察記録が残されていないため焼土の堆積状態等、使用状況は不明である。また、主体部内の主軸からみて北東隅に埋甕が検出された。埋甕下には径38cm、深さ32.8cmのピットが穿たれている。柄鏡式の住居跡からはよく埋甕が検出されるものの、張り出し部や張り出し部と主体部の繋ぎ目に構築されるのが通例で本跡のような部位から検出されるのは特異な例と言える。本跡の旧期の住居に伴うものか、調査区の西側未調査範囲に存在が見込まれる住居に伴うものか、単独の屋外の埋甕などの可能性も指摘しておく。

出土遺物は土器6点、石器1点を図示した。1は埋甕土器。胴下半部以下を欠損する。口縁に波状の小突起を持つ。RL単節繩文を地文とする。口縁に沿って沈線を巡らせて潰れた長梢円形を描いている。口縁突起の直下には、3本（1対）の沈線で縦位の対弧文を描き器面を縦位区画する。区画内には3本（1対）の沈線でJ字文を描いている。口径27.6cm、残存器高28.2cmを測る。2は内外面に横方向のナデ調整がみられる口縁部片。3は逆くの字状に立ち上がる口縁部片。文様がみられずいわゆる小仙塚タイプの深鉢か？内面に煤の付着がみられる。4は半截竹管の割れ面を用いてコンパス文や単沈線や細沈線を描出す胴部片。5は単節繩文LRを地文に持つ胴部片。2本（1単位）の沈線で縦位区画や、区画内の文様を充填する。6は胴部径が一部復元できる破片である。復元胴径39.2cm、残存器高11.4cm。地文に単節繩文LRを施後2本（1組）の太沈線で文様を描出す。7は石皿。正面に3、裏面に2個くぼみあり。両面とも磨り面あり。安山岩。最大長12.7cm、厚4.1cm、重量1033.4gを測る。

本跡は出土遺物等により、堀之内1式期の所産である。

5号住居跡（第8図）

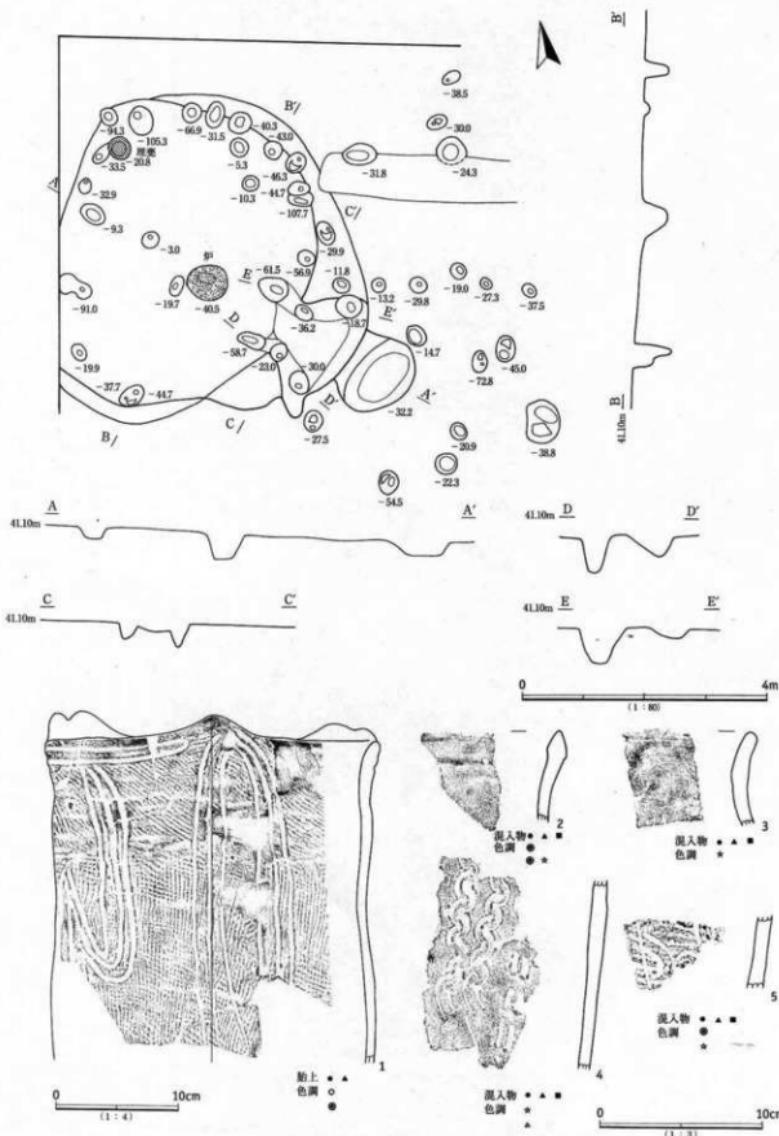
本跡はB区の真中からやや西よりで、4号住居跡から南約2mに位置する。覆土及び掘込みを消失し床面も削られている。平面形は不整梢円形を呈し、残存部分で長径491cm、短径401cmを測る。床面にまで及ぶ削平のため浅い柱穴等は消滅している可能性があり柱穴構造や主軸方向等は不明である。

本跡に伴う遺物は出土しなかったため明確な構築時期は不明であるが、周辺遺構や周辺の出土遺物より堀之内1式期頃であろう。

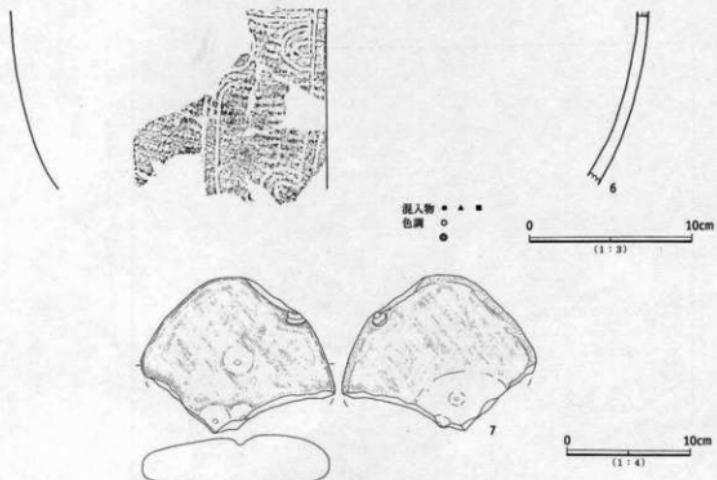
6号住居跡（第8図）

本跡はB区の東隅に位置しているため、東半部は未掘である。本跡から1.2m北西に5号住居跡が位置する。覆土及び掘込みを消失して床面も削られている。柱穴構造や主軸方位は不明である。

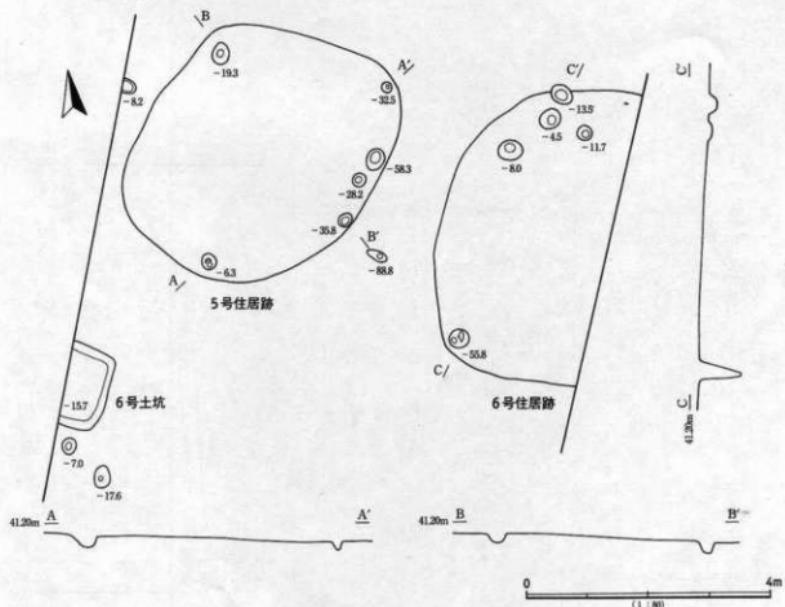
本跡も5号住居跡と同様出土遺物がみられないものの同様の理由で堀之内1式期頃の所産であろう。



第6図 4号住居跡と出土遺物



第7図 4号住居跡出土遺物(2)



第8図 5・6住居跡

2. 土 坑

1号土坑（第5図）

3号住居跡を切る。長径156cm、短径130cm、深さ32cmの長楕円形の掘込みの南に径70cm前後の掘込みが連なる。土坑底面に径25cm、深さ13cmの小ピットが穿たれている。出土遺物はみられないものの、2号住居跡の切り合い関係により、構築時期は堀之内1式以降である。

2号土坑（第5図）

3号住居跡を切る。北縁が1号土坑と重なる。長径170cm、短径120cm、深さ36.9cmを測り、平面形は楕円形を呈する。出土遺物はみられない。1号土坑と同じ理由で構築時期は堀之内1式期以降である。

3号土坑（第5図）

2・3号住居跡を切る。東半部は調査区域外に広がり規模・平面形態は不明である。覆土は暗褐色土を主体に4層に分層される。調査区域内での深さ44.2cmを測る。出土遺物はみられないものの、1号土坑と同じ理由で構築時期は堀之内1式期以降である。

4号土坑（第5図）

2号住居跡を切る。長径220cm、短径170cm、深さ73.2cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。出土遺物はみられないものの、1号土坑と同じ理由で構築時期は堀之内1式期以降である。

5号土坑（調査時番号D-001）（第5図）

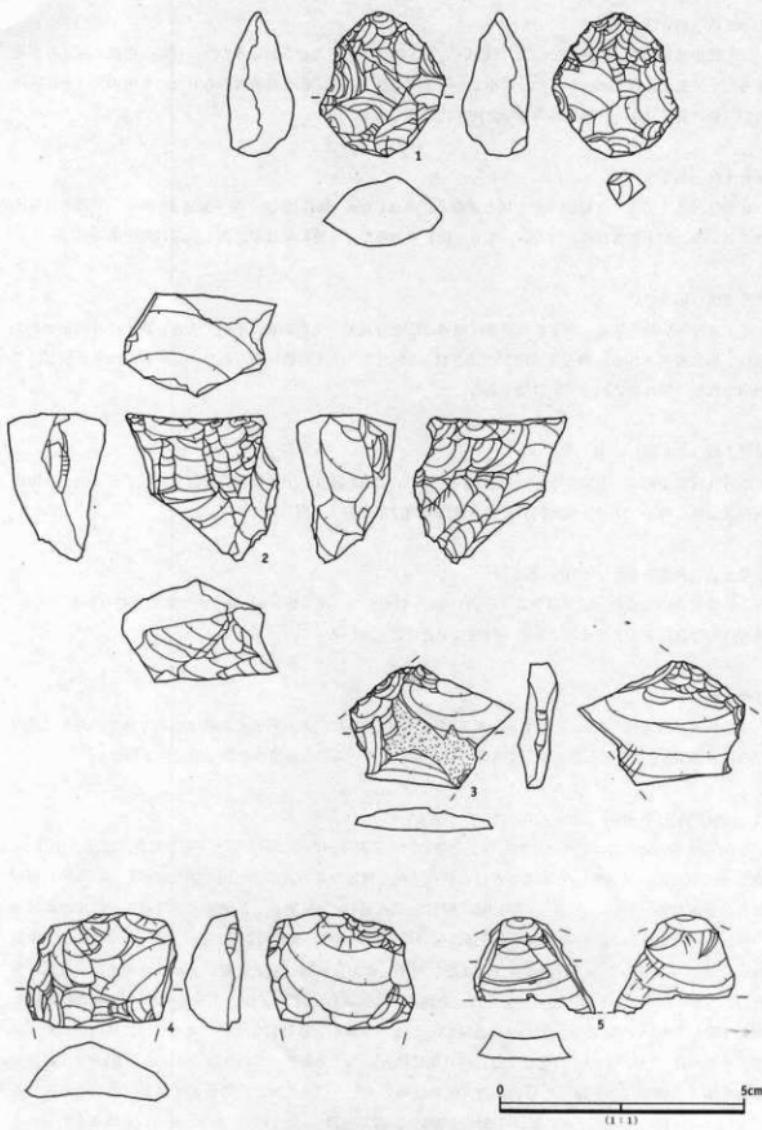
1号住居跡の南西45cmに位置する。長辺118cm、短辺86cm、深さ16.5cmを測り、平面形は長方形を呈する。調査時の観察によると覆土等より構築時期は中近世としている。

6号土坑（第3図）

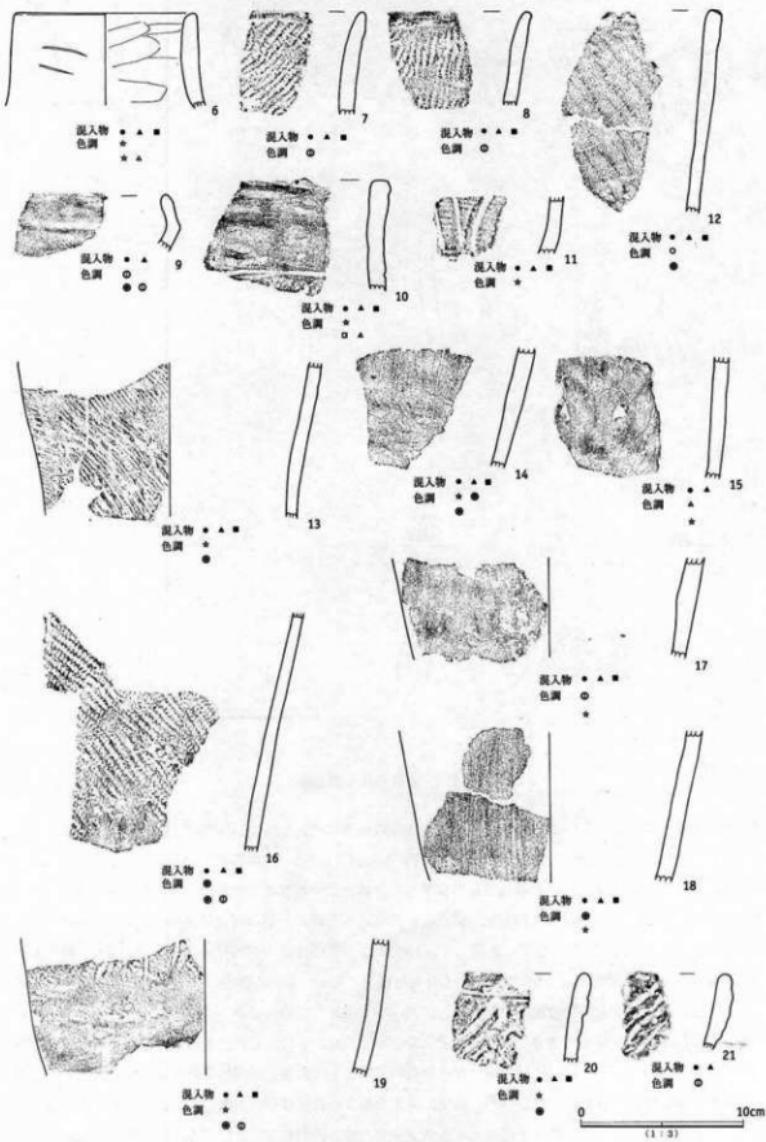
5号住居跡の南西200cmに位置する。西半部は調査区域外に広がり規模・形態は不明である。調査区域内での深さ15.7cmを測る。形態や覆土が5号土坑と類似しているので、構築時期は中近世であろう。

3. 遺構外出土遺物（第9・10・11図）

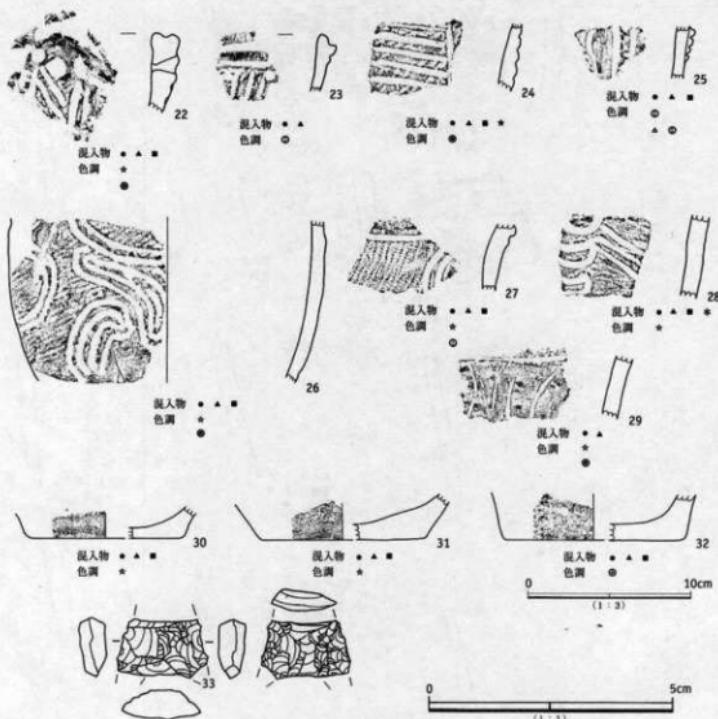
1は尖頭器。未製品。素材剥片の打面が下端に、主要剥離面が裏面中央部と下部に残存。瑪瑙。長2.9cm、幅2.6cm、厚1.3cm、重量9.5gを測る。2は石核。裏面左側縁からの剥離後打面を90度転移している。右側縁団の剥離が最終。頁岩。高3.0cm、幅3.2cm、厚2.0cm、重量17.4gを測る。3は二次剥離剥片。二次剥離は腹面背面の順に施される。右側縁団の剥離は破損時の偶発的剥離。流紋岩。長2.5cm、幅3.4cm、厚0.6cm、重量5.0g。4は二次剥離剥片。打面は剥片剥離時に欠損。背面左側縁に二次剥離。下部は腹面側から折損。流紋岩。長2.4cm、幅3.1cm、厚1.2cm、重量6.9gを測る。5は剥片。打面なし。フェザーエンド。両側縁破損。緑泥片岩。長2.0cm、幅2.5cm、厚0.5cm、重量1.8g。1~5は旧石器時代の所産であろう。6は口がややすばまる小型の鉢。口縁部が3/4程遺存する。内外面に横方向のナデ調整がみられる。7・8ともLR単節斜縫文を施す口縁部片。9はくの字状に内溝気味に立ち上がる口縁部片。内外面とも横方向のナデがみられる。10は口縁部に三角形の小突起が巡る口縁部片。口縁部~肩部にかけて無文帶となるいわゆる小仙塚タイプの深鉢であろう。11はLR単節縫文を地文に持つ胴部片。2本（1単位）の沈線で文様を描出す。沈線



第9図 遺構外出土遺物(1)



第10图 遗构外出土遗物(2)



第11図 遺構外出土遺物(3)

間を磨消すところとしないところがみられる。12は口縁部に刻目を持つ口縁部片。胴部には条線文を縱位に対弧状に巡らす。13は径が一部復元できる胴部片。復元胴径18.7cm、残存器高9.4cmを測る。無筋斜繩文L?を全面に施文する。14は文様の末端部付近の胴部片。半截竹管の割れ面で縱位に乱れた沈線文を施す。15・17・18は無文の胴部片。15は復元胴径12.9cm、残存器高6cmを測る。18は復元胴径18.6cm、残存器高9cmを測る。16は単節斜繩文RL?を施文する胴部片。19は文様の末端部付近の胴部片。復元胴径21.6cm、残存器高9.7cmを測る。地文に単節斜繩文LR施文後、沈線文を縱位に描いている。20~23は口縁部片。20は地文に繩文を施文後、口縁部下を横位の沈線で区画後、区画内を太沈線で充填している。21は太沈線を斜方向に巡らせている。22は突起を持つ。地文に繩文を施文している。突起の下に左右に円形刺突を付随させた径16mm程度の貫通坑を穿ち円形刺突を起点に横・縱に沈線を引いて器面を区画後、区画内を斜沈線で充填している。23は器面が摩滅しておりさだかではないが、地文に繩文を施文した痕跡が窺われる。頸部の横走する隆帯を挟む上下に沈線を沿わせた後、數本単位の沈線を垂下させた後、円形刺突文を加える。24は地文に繩文を持つ胴部片。垂下する沈線で器面を区画後、沈線を横に併走させて充填している。25は小型の精製土器。他の個

体と比べて薄造りで、胎土や焼成もよく明らかに顔つきが異なっている。垂下する刻目隆帯の両側に沈線を併行させている。26は一部径が復元できる胴部片。地文に縄文施文後、2本（1単位）の太沈線で文様を描出する。残存胴部径19.4cm、残存器高13.1cmを測る。27・28は地文を縄文で施文後、沈線で文様を描出する胴部片。27の地文は単節縄文LRである。28の沈線文は懸垂文と斜沈線であろう。29は沈線文のみの胴部片。30・31・32は底部片である。30は底部が1/5程遺存する。復元底径9.2cm、残存器高15cmを測る。31は底部が1/3程遺存する。復元底径10cm、残存器高2.2cmを測る。32は底部が1/4程遺存する。復元底径10.8cm、残存器高2.8cmを測る。6～32はすべて縄文時代後期堀之内1式の所産である。33は無茎石錐。先端部、両脚部破損。最終調整は、裏面正面の順に施される。黒曜石。長1.2cm、幅1.9cm、厚0.6cm、重量13g。

第5章 まとめ

今回の調査により、県文化財センター調査地点よりもさらに南に遺構が展開することが明らかになった（第12・13図参照）。しかも検出された遺構、遺物ともほぼ堀之内1式のみである（注1）。この成果により堀之内1式期の集落の南縁は埋没谷の谷頭部とおはしき台地南側緩斜面部に及んでいることが明らかになった。これは（県文化財センター調査地点の成果と併せて）、加曾利B式の遺構の分布が台地平坦面に偏り、台地南側緩斜面部には少ないと合わせて「時期が新しくなるにつれて遺構の分布が北へ移行する」（注2）という、時期による遺跡の占地の変遷を追証するものである。

また、検出した堀之内式期の柄鏡式住居跡は山武地方では初見ではなかろうか。管見では類例を知らない。

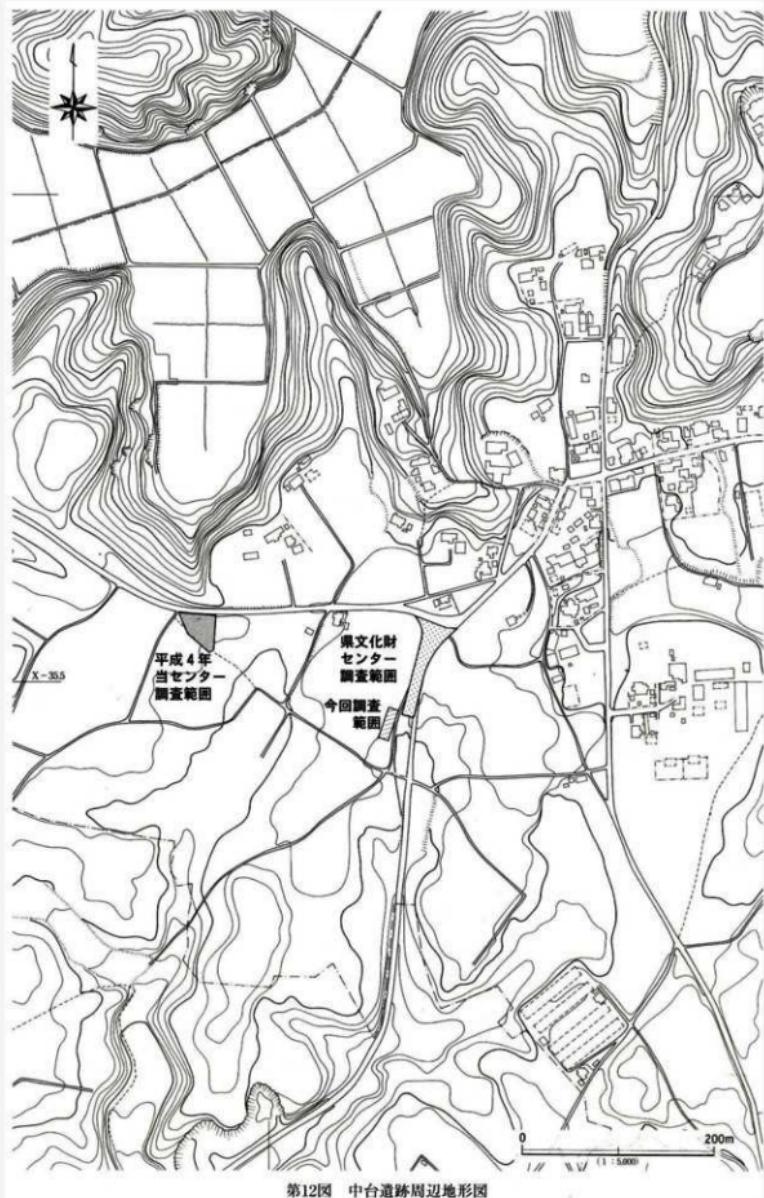
この他、第2章第2節周辺の縄文時代後期の遺跡の執筆中、堀之内2式の遺跡が1式に比して極端に少ないことに気づいた。これは当エリアだけの傾向なのか、それとも山武郡共通の特徴なのだろうか今後の課題としたい。

注1・6号土坑のみ中近世の所産である。

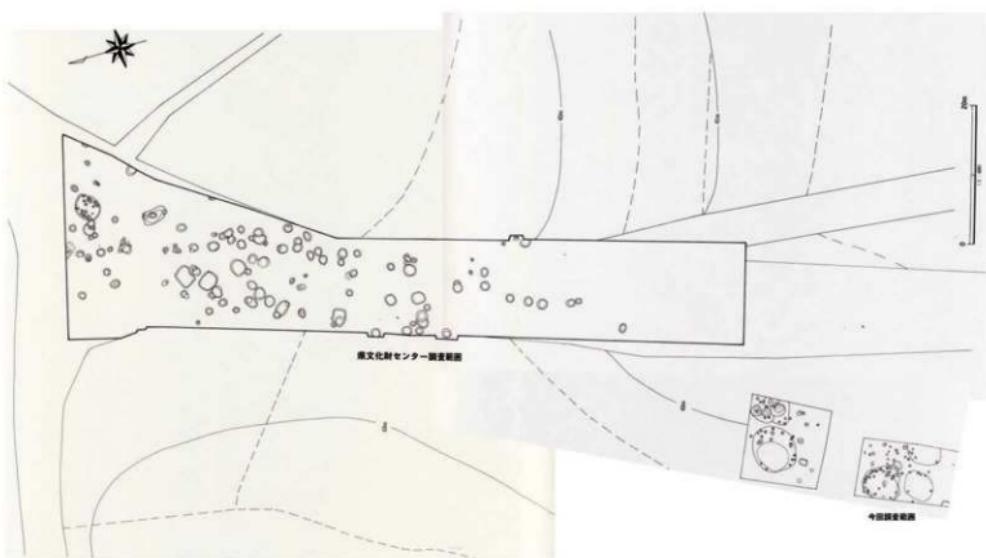
注2・1985宮重行『第2章中台貝塚第4節小結』『主要地方道成田松尾線V』千葉県文化財センター

参考引用文献

- 1974沼沢 順『松戸市金橋台遺跡』 - 国鉄小金線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 - 千葉県都市公社
1982鈴木良一 - 「[研究ノート] いわゆる「柄鏡形住居址」について」『千葉県文化財センター研究紀要7』千葉県文化財センター
1984前田 淳他『千葉県松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書』 - 一の谷西貝塚遺跡調査会
1985村田文夫『柄鏡形住居とその周辺』『縄文集落』考古学ライブラリー 36 ニューサイエンス社
1992管見英輔『II遺跡の位置と環境』『千葉県横芝町木戸台大谷遺跡』山武郡市文化財センター
1992領塚正浩『第2章遺跡・遺物各論第2節堀之内貝塚出土の堀之内式土器』『堀之内貝塚資料図譜』市立市川考古博物館研究調査報告第5冊
1994『財團法人山武郡市文化財センター年報No 9』 - 平成4年度 - 山武郡市文化財センター
1998『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』 - 香取・海上・匝瑳・山武地区)改訂版 - 千葉県教育委員会
1999忍澤成視『千葉県市原市原祇園原貝塚』上總国分寺台遺跡調査報告V市原市教育委員会



第12図 中台遺跡周辺地形図



第1回 千石橋跡遺物配置図



1. 空撮（全景）



2. 1号居住跡



3. 2・3号居住跡



4. 4号居住跡（空撮）



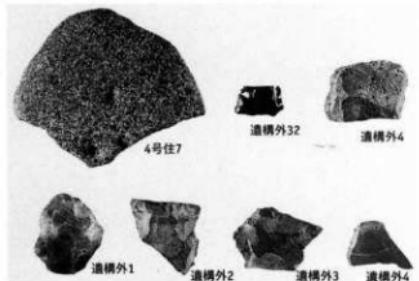
5. 4号居住跡



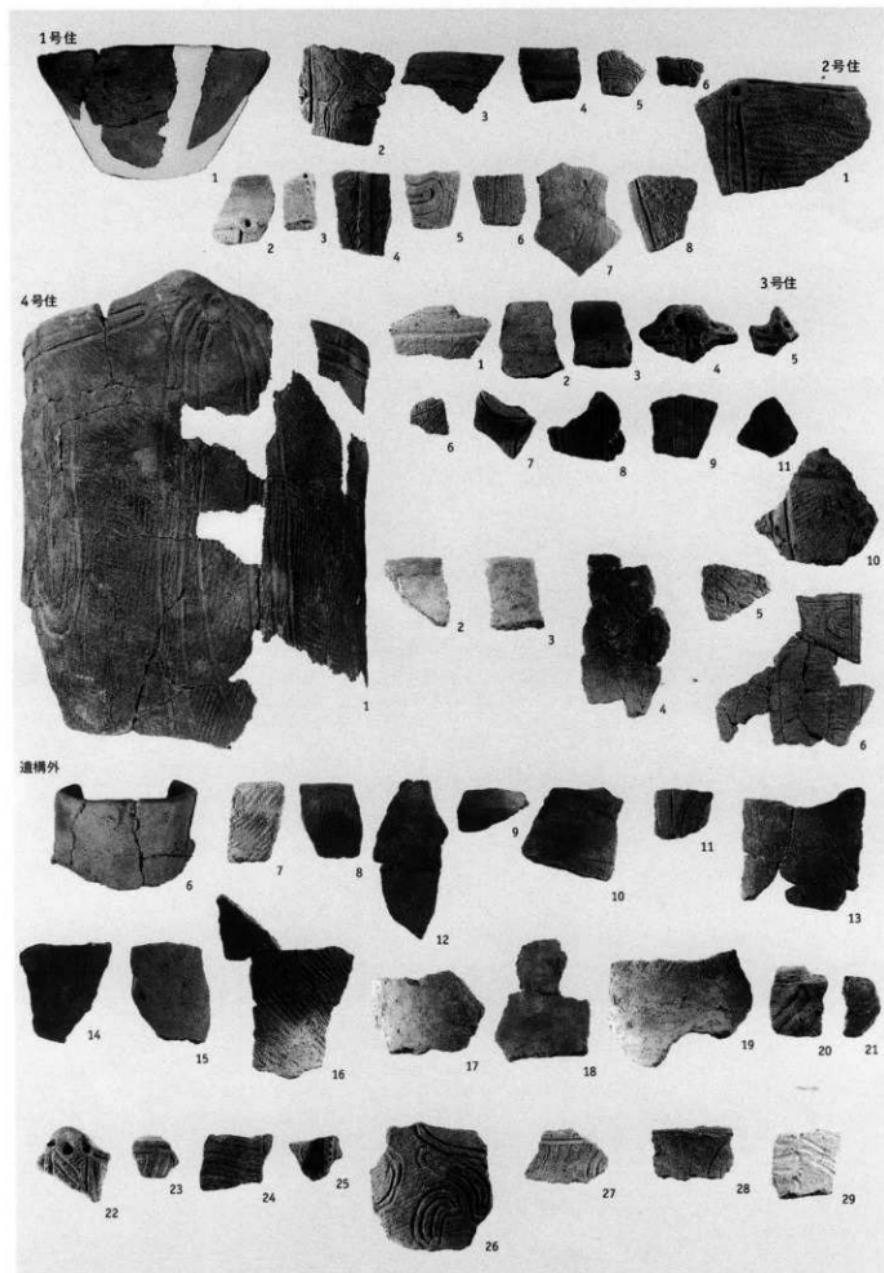
6. 5・6号居住跡



7. 1・2・3・4号土坑



8. 出土石器類



報告書抄録

ふりがな	なかだいいせき (1349-3ちてん)
書名	中台遺跡 (1349-3地点)
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人 山武都市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第81集
編著者名	福見 英輔
編集機関	財団法人 山武都市文化財センター
所在地	〒299-3242 千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356-2
発行年月日	西暦 2003年3月26日

所取遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯 °'."	東経 °'."	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中台遺跡 (1349-3地点)	柏芝町中台字宮台1349-3	12408	山文七-216	35° 40' 41.02"	140° 25' 51.73"	20021011 20021030	確認調査 99/990ml 本調査 273ml	個人住宅建設

特記事項					
中台遺跡 (1349-3地点)	集落跡・ 貝塚	縄文時代・ 奈良・平安 時代・中近 世	竪穴式住居跡・6軒 土坑・.....6基 ピット	縄文土器、石器、 剥片、礫、土師器、 須恵器	縄文時代後期壠之内1式期の集落跡。 当地域では稀な柄鏡式の住居跡を検出。

中台遺跡1349-3 地点

印 刷 平成15年3月20日

發 行 平成15年3月26日

編 集 財團法人 山武郡市文化財センター
千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356-2
TEL 0475-72-3211

發 行 千葉県横芝町

印刷・製本 株式会社 正文社
千葉県千葉市中央区都町1-10-6
TEL 043-233-2235